

書 評

丸山浩明編：『ブラジル 世界地誌シリーズ6』朝倉書店、2013年10月刊、176p., 3,400円（税別）

ブラジルは南アメリカ大陸の約50%を占め、日本の約23倍という広大な国土をもち、世界第5位に相当する人口1億90000万余を擁する多民族国家である。本書は、このブラジルの多様性を、開発史に沿って経済・文化の重層化あるいは混在化の過程を丁寧に解説した好著である。ブラジルでは、一世を風靡する国際商品の登場によるブーム（boom, 好景気）と、その急速な衰微によるバスタ（bust, 不景気）が交互に繰り返すサイクルがあり、それに合わせて発現する人や資本の大規模な国内移動や開発フロンティアの拡大に特徴を見いだせるという。ノルデステ（北東部）におけるブラジルボク（毛織物などの紅色染料の原料）やそれに続く砂糖、ミナスジェライスの貴金属や宝石、サンパウロのコーヒーといった基幹的な産物に加えて、牧畜、綿花、タバコ、天然ゴムといった副次的な商品のブームが連鎖的に、あるいは並行的に発現する過程において、アフリカからの奴隷渡来、ヨーロッパや北米との貿易の拡大、アジアからの農業移民の増加の経緯などが順を追って紹介されていく。本書はページをめくるたびにどんどんブラジルの世界に引き込まれていく、そんなわくわくする内容に富んでいる。

具体的に中身を見ていこう。まず、1章「総論－ブラジルの発展と地域的多様性－」（丸山浩明）では、「ブラジルらしさとは何か？」をキーワードに、さまざまな学問分野にまたがる豊富な文献の中から、さまざまな人種が行き交う様子が紹介されている。そして、一見外部の人には雑然と無秩序にみえる多様性に富んだブラジルの中に、実

は組織化された秩序や規範、まとめ、統一性が見受けられることを、「多様性と統一性」、「コントラストの中の調和」、「対立要素の調和的な統一性」、「対立関係の均衡」といった、これまで既往文献の中で用いられてきた挑戦的とも思われるキーワードを紹介しながら、一見では矛盾するキーワードの中にこそ、真の意味でのブラジルらしさが読み取れることを述べている。1章は、ブラジルを描き出すための地誌学からの視座を提供し、2章以降に続くさまざまな事例やコラムを理解する上で必要不可欠な、ブラジルの基本的な歴史的・地理的事項が解説されている。

2章「多様な自然環境と環境問題」（宮岡邦任、吉田圭一郎）ではブラジルの自然環境を概観している。地殻運動の影響を受けた造陸運動によって、ブラジルの国土は西端のアンデス山脈、赤道付近のアマゾン平野や中西部のパンタナール、これらを取り巻くように分布するブラジル高原やギアナ高地といった台地に基本的に分けられること。その後、地表の水の流れや浸食、土砂の堆積といった外的な要因によって形成された地形も広く分布すること。広大な国土ゆえに多様な気候がみられ、雨季と乾季では景観が異なること。また、こうした多様な気候は、結果としてさまざまな植生や土壌を生み出すこと。そして何よりも、豊かなブラジルの自然環境が、人間による開発の進行により、森林破壊や土壌浸食といった深刻な環境問題に悩まされていること。この章では、自然地理学者の目からみたブラジルの特徴が解説されている。

3章「都市の形成と発展」（萩原八郎）では、開発の歴史と都市建設に着目してブラジルの都市システムが論じられている。16世紀に大西洋岸にサンパウロやリオデジャネイロを含む17の植民

都市が作られたことに始まり、その後には内陸部の開拓が進み、今日では首都直轄区（ブラジリア）や全国26州の州都を含め、人口10万以上の都市が288存在している。これらの都市は、おおむね順位・規模法則のパターンに沿っているという。また、3章の後半は国土の均衡ある発展のシンボルとして、それまで未開発だったブラジル中央高原に、車社会に対応し、計画人口50万として1960年に誕生した美しい計画都市・ブラジリアの建設経緯が解説されている。ブラジリアは2012年には人口21万（首都圏人口は300万）を超える規模に成長した。しかし、所得格差や居住問題、貧民街の治安悪化などの社会問題が深刻なことも示されている。

4章「多人種多民族社会の形成と課題」（三田千代子）では、先住民であるインディオ、1500年のポルトガル国王によるブラジル「発見」宣言、16～19世紀にかけて約300年間続いた奴隷貿易によって渡来したアフリカ人、さらにはアジア系移民を含めた複数の民族がブラジルの地で出会い、異なる人種や民族間で混血が進んだ。ブラジルでは、こうした、さまざまな民族文化の接触や変容、創造を通じてブラジル各地に個性豊かな経済、社会、文化的風土が作られてきたという。続く5章「宗教の多様性と宗教風土の変容」（山田政信）では、カトリック教の国というイメージの強いブラジルだが、実際には先住民、アフリカ系民族、さまざまなヨーロッパ系民族に加え、日本などのアジア系移民らが持ち込んだ宗教が重層的に展開しており、多様で豊かな宗教風土がみられることが述べられている。

6章「ブラジル音楽の多様性とその文化的背景」（高場将美）では、元・中南米音楽雑誌の編集長という豊富な知識をもつ著者が、先住民、ポルトガル人、そしてアフリカ人という代表的な3民族の美意識や思想、文化などが混在・融合して生まれ

たブラジル音楽の多様性を紹介している。音楽ジャンルやスタイルは多様であり、それ一つでブラジル音楽を代表させることはできないものの、ショーロ、サンバ、ブラジル北東部ノルデステなどの地方の音楽、ボサノヴァ、MPB（ブラジルポピュラー音楽）といった、外国でも広く知られているブラジル音楽の誕生とその変遷が紹介されている。

7章「アグリビジネスの発展と課題－大豆・バイオ燃料生産の事例」（丸山浩明）は、現代ブラジルの農村地域で顕著な発展をみせる大豆・バイオ燃料生産にみられるアグリビジネスの現状と課題が検討されている。もともとは小麦の裏作として始まった大豆生産は、背丈の低い灌木類に覆われ不毛の大地といわれた中西部にみられる広大なサバンナ地域（セラード）の農地造成事業の展開とともに急拡大した。さらに、穀物メジャーの参入なども加わって、大豆がグローバルに取引されるブラジルの戦略的な作物として成長する過程が述べられている。また、バイオ燃料の生産の拡大もまた、グローバルな視点抜きには理解できない。地球温暖化問題の解決には化石燃料の消費抑制が不可欠であり、その代替エネルギーとして注目を浴びるバイオ燃料（バイオエタノールとバイオディーゼル）の生産が紹介されている。ブラジルのバイオ燃料の生産は、1925年にまで遡るほど古い歴史をもつが、オイルショックを契機とするエネルギー政策の見直しによって国家戦略的に推進されたこと、また、ブラジルのバイオ燃料が糖分を多く含むサトウキビを主原料とすることで、アメリカやドイツなどのバイオ燃料生産の先進国に比べて効率のよい生産が行われていることなどの詳細が述べられている。

8章「観光の発展とその課題」（仁平尊明）では、ブラジルを訪れる外国人観光客の特徴を概観した後、ブラジルが世界に誇る観光地の特徴を、自

然観光地、文化的・都市観光地に分けて地方ごとに詳細に紹介されている。ブラジルでも、1990年代後半からはエコツーリズムに代表されるオルタナティブ・ツーリズムも盛んになってきた。2003年には観光省が設立され、今後はオリンピックやワールドカップの開催によって、ブラジルの観光産業は一層の拡大が見込まれている。その一方で、都市部の治安の悪さや農村部の急激な変貌といった負の側面についても考察されている。

9章「ブラジルに渡った日本移民」(丸山浩明・名村優子)では、1908年の「笠戸丸」移民から1970年代にかけて日本からブラジルに渡った約25万人の日系移民、逆に、1980年代後半からみられるようになった日系ブラジル人による日本への出稼ぎ(約20万人)が取り上げられている。続く10章「日本の中のブラジル社会」(片岡博美)では、日本国内におけるブラジル人の社会と生活、そしてブラジル人を対象としたエスニックビジネスの詳細が紹介されている。

最終章の11章「ブラジルと世界、そして日本」(丸山浩明)では、前章までで詳細に展開してきたブラジル社会の多様性と統一性の形成要因と歴史の変遷に関する考察を踏まえ、ブラジルという国家や国民の特性がグローバルな文脈の中で、とりわけ日本との関係において包含しうる意味と可能性について、編者の詳細な考察が展開されている。

そして、本書の大きな特色として以下の点も付け加えるべきだろう。すなわち、各章の冒頭に添えられたリード文は内容をよく要約していてわかりやすい上、各章の末尾に配されたコラムの内容が秀逸なことである。とくに、世界的に有名なブラジル人に関する3ページにもわたるコラム「世界を魅了するブラジルサッカー」(矢持善和)に代表されるように、牧畜文化の多様性と肉食文化、熱帯雨林の減少、熱帯半乾燥地域のセルトン、逃亡奴隷の共同体「キロンボ」、土地なし農民運動

と解放の神学、ブラジルの音楽スター、鉱山開発、世界三大瀑布イグアス観光、アマゾン移民と日本食、日本のブラジル人学校を扱ったコラムは、それぞれのコラム一つだけでも1冊の本を読んでみたくなるような魅力的なもののばかりである。

一方で本書は、この国の魅力的な面だけを切り取ったものではないことも特徴である。例えば、ブラジルのサトウキビ栽培の過度の拡大がもたらす弊害についても述べられている。農業労働者の過酷な労働環境、飢餓に苦しむ世界が多い現実の中で、本来では食糧や飼料として流通できる農産物をバイオ燃料として利用することの是非、大豆や穀物よりもバイオ燃料用の農作物が優先して生産されることに伴う市場価格急騰といったグローバルな問題の惹起などは、そうした問題の代表的なものである。さらには、サトウキビ生産の拡大と引き替えに進むアマゾンの熱帯林破壊の問題、バイオエタノール工場から大量に排出されるサトウキビの洗浄水や廃液による水質汚染の問題、今日では表面的にはあまりみられない人種差別が実は根強く残る側面も見受けられること、そして、整然と並ぶ現代的な都市景観の拡大の一方で、貧困層の増加や治安の悪化といった負の側面も同時に見られることなどが紹介されている。急速な人口増加と経済拡大を経験し、債務国から債権国へと劇的な変貌を遂げたグローバル経済の「優等生」といわれるブラジルであるが、開発や発展と関連する諸問題のトレードオフの関係を同時に内包する現代ブラジルの姿を、本書はきちんと描き出している。

評者はオーストラリア地誌を専門としており、実はブラジルに行ったことはないのだが、編者と同じく地誌学の視点から一つの国を多角的にみる視点は持ち合わせている。この視点をもって本書を読んでみても、オーストラリアよりも一回りも、いや、数倍も奥の深いブラジルの地域性に驚

嘆を隠せない。ポルトガル国王によるブラジルの発見宣言から500年余を数え、ヨーロッパ、アフリカ、北米、そしてアジアの文化が重層的に織りなすことで形成されたブラジルの多様性を知れば知るほど、日本からみて地球の反対側にある最も遠いこの国に無性に行きたくなる衝動に駆られる。専門書ならではの堅さは無く、豊富な参考文献やブラジルに長く関わってきた著者らの目で切り取った生き生きとした記述にあふれる本書は、現代ブラジルをより深く知る必読書である。

(堤 純)

村山祐司・駒木伸比古著：『新版地域分析 データ入手・解析・評価』古今書院、2013年9月、188p., 2,800円(税別)

「学生時代に耽読した専門書は？」とたずねられたら、皆さんはどの本をおこたえになるだろうか。本稿をご覧になっている多くは地理学を専門とする研究者や教育者、あるいは地理をこよなく愛する方々とお察しするが、そのような皆さんからは地理学関係の数々の名著があげられることであろう。そして、そのような本は、これまでの皆さんの人生に少なからぬ影響を与えてきたと推察する。卒業・修了から年月が過ぎ、今では表紙も色あせて、あらためて読むような機会が少なくなっている、やはりそのような本は本棚の特別な場所に鎮座しているのではないだろうか。

先日とある場所で、思わぬ形で私にとっての「その本」を手にする機会があった。しかし、「地域分析」とタイトルが書かれたその表紙は、評者の本棚に並ぶそれとは違って全く色あせてはいなかった。むしろ色鮮やかな図が並ぶ表紙へと姿を変えていた。よくよく注視すれば「地域分析」の前に「新版」の文字が躍っている。すなわち、こ

の「地域分析」は、評者が学生時代に耽読していた旧版から新たに生まれ変わった「新版」であった。

ここであらためて整理したいが、1990年に初版が発行された「地域分析」はこれまで2度、大きな改訂が施されている。1993年に増補版が、1998年には増補改訂版が発行され、その時々々の最先端の新情報が続々と盛り込まれていった。今回の新版の発行は、最後の増補改訂版から実に15年ぶりのことになる。増補改訂版までは村山の単著であったが、今回は新たに駒木が著者に加わった。また、旧版でのサブタイトルは「地域の見方・読み方・調べ方」と銘打たれていたが、新版の発行にあたって「データ入手・解析・評価」にリニューアルされている。

あの「地域分析」がどのように改訂され、何が新たに加筆されたのだろうか。時代の最先端の情報を多分に掲載している書籍は、時間の経過に伴う鮮度の喪失が著しいという弱点を持つ。特に、1990年代末以降の十数年間は、GIS(地理情報システム)や空間・統計データ、多変量解析ソフトウェアなどが急速に普及した時期であり、本書を取り囲む状況は多大な変化を遂げた。この15年という大きく重い年月を果たして克服できるのか?大きな楽しみと若干の不安を抱きながら、表紙をめくった。

はじめに目に入ったのは、章構成から大きな変更が加えられている点であった。全16章から構成されているが、第2章以降は大きく2部に分けられている。第I部「多変量解析で地域の特徴を探る」(第2章～第9章)と第II部「地域をいかに分析するか—地域分析の方法—」(第10章～第16章)である。前者は旧版の章構成が引き継がれた一方、後者は今回の新版に新たに追加された。第I部の内容は、旧版で取り上げられていた多変量解析で主に占められているのに対して、第II部で

は GIS を援用しての空間解析に関する内容などが盛り込まれている。

以下では、各章について内容を概観したい。まず第1章「地域分析の情報をいかに入手するか」では、文献、データ、ソフトウェアの入手方法についてまとめられている。インターネットの普及も相まって、文献や研究成果を効果的に検索できたり、統計データや空間データなどを手軽に入手できたりするようになった。寧ろ、あまりに膨大な情報・データがインターネット上に溢れており、それらを全て把握することが困難となっている。本章では、それらの主要な情報・データの提供元や Web サイト、ポータルサイト等が紹介されており、地域分析を行う準備段階において非常に有用である。加えて、フリーながらも本格的な機能を有する多変量解析ソフトや GIS ソフトも紹介されており、高価なソフトを用意できない場合などは、非常に重宝するであろう。

次に、第 I 部「多変量解析で地域の特徴を探る」について、各章を概観する。既述の通り、この第 I 部は、旧版の内容をもとに章が構成されており、各章のタイトルもそれぞれ受け継いでいる。しかし、記述内容については大幅に変更が加えられている箇所が散見された。第2章「地域分析に役だつ多変量解析」では、多変量解析の概説からはじまり、その歴史的展開や地理行列、多変量解析の活用法など、第3章以降に紹介される分析法を踏まえた基本的なイントロダクションの役割を果たしている。

第3章から第8章までは、章ごとに一つの変量解析が並んでいる。第3章「地域事象の予測／説明に役だつ回帰分析」、第4章「潜在的構造を探るのに役だつ因子分析」、第5章「地域事象の類型化に役だつクラスター分析」、第6章「地域事象間の関連を探るのに役だつ正準相関分析」、第7章「地域事象を空間上に布置するのに役だつ多次元

尺度構成法」、第8章「質的データを数量化するのに役だつ数量化理論」のように、代表的な多変量解析について、具体的事例をあげつつ、分かりやすく説明が加えられている。さらに、第9章「地域分析に役だつその他の多変量解析」ではパス解析、判別分析、Q 分析が説明されている。

第 I 部でまず目を惹いたのは、随所において新しい研究成果の事例が取り上げられている点である。多変量解析の手法的な説明だけであれば、旧版で取り上げられた事例だけでも十分であろう。しかし、社会経済的状況の変化に伴い、地理学が取り組むべき課題やそれに対するアプローチも変化していることは事実である。そのような変化に対応するために、新たな適用事例へと更新し続けるところからも、情報の鮮度に拘りをみせる著者らの熱意が感じられる。また、多変量解析を題材としつつも、数式での説明は最低限に抑えて、データの入力から分析結果の出力までを概念的に分かりやすく説明している。この点は、旧版からの引き続きの特長である。

次に「第 II 部 地域をいかに分析するか—地域分析の方法—」(第10章～第16章)について概観したい。第 II 部に含まれる七つの章は、内容的に以下の三つに大きく分けることができよう。GIS による空間解析を前提とした第10章から第12章、主に交通に関する計量地理学的手法の第13章から第15章、そして今後の地域分析を展望する第16章である。

前者の第10章から第12章までは、主に GIS での分析を前提とした内容となっている。第10章「メッシュに基づき分析する」では、地域メッシュ統計とそれを活用した小売業の地域分析例が示されている。地域メッシュとは一定間隔の経緯度で格子状に区切られた区画であり、それらを単位地域として集計された国勢調査や商業統計調査などの統計調査のデータが公表されている。ここで

は、重ね合わせが容易である地域メッシュの特長を生かした分析例が示されている。続く第11章「領域を設定する」と第12章「集積を把握する」では、GISの代表的な空間解析機能の一つであるポロノイ分割と、点分布パターン分析が紹介されている。前者については新たな学区の設定を事例に、後者については「まち歩きマップ」を事例に、いくつかの分析例が示されている。

第13章から第15章では、主に交通に関する計量地理学的手法が紹介されている。第13章「ネットワークで考える」では、シンベル示数に始まる古典的なネットワーク分析から、シミュレーション・モデルまで説明が展開されている。第14章「近接性をはかる」では、近接性について四つのタイプの定量的指標を紹介している。それぞれの指標の特徴が詳細に説明された後に、接触ポテンシャル測度を利用した近接性の時系列的変化について具体的な例を示している。第15章「地域間の流動性をみいだす」では、地域間の流動を把握するための空間的相互作用モデルが紹介されている。地点の規模（吸引力変数）と地点間の距離をもとに、地域間の流動量を推計する手法であり、静的なデータを動的なデータへと転換するモデルといえる。いくつかの制約条件が伴う空間的相互作用モデルの他に、理論の基礎となる重力モデルや、エントロピー最大化モデルが紹介されている。この三つの章では、直接的にGISとの関連性は強調されていないが、いずれもGISを援用することにより、測定にかかる労力の大幅な削減と、分析精度の向上が大いに期待できる手法である。

最後に、第16章「これからの地域分析」では、ここまで紹介されてきた内容を受けて、今後の地域分析へと展望を加えている。近年の日本でも大きな問題となっているフードデザート（食の砂漠）問題を事例に、地域分析の結果を介して、研究者と住民とが協同する取り組みが紹介された。最後

に著者らは、研究者と地域住民とによって「地域分析」を行うことが地域づくりの礎になると示唆している。

以上、全ての章を読み終わり、評者が当初抱いた不安は杞憂に終わったことに安堵した。以下、本書の特長について、最後にまとめておきたい。

第一に、地域分析の理論だけでなく、データの入手といった実際の地域分析には必要な作業までをカバーしている点である。定量的な分析手法を用いる場合は、必ずしも目的に沿った最善の手法が選択できるわけではなく、利用できるデータによって大いに制約を受ける。すなわち、どのようなデータを入手できるかが、効果的な地域分析を実現できるか否かの分かれ目となる。定量的分析に関する書籍は数多くあるが、データの所在の最新情報について掲載しているこのような書籍はほとんどみられない。

第二に、各分析において、事例を引用して分かりやすく解説されている点である。高度な数学的処理が施される計量分析について、高度な数学的知識を必要なしに、読者が分析内容のイメージを通じて理解できるよう説明されている。さらに、各分析手法を用いた事例が引用されていることにより、実際にどのような適用ができるのかを、読者は具体的に理解することができる。「計量的手法を用いて地域分析を行いたいが、どのような手法を用いればよいかよく分からない」という人には、打ってつけであろう。各章のタイトルについても、単なる手法名ではなく、「その手法を使って何ができるのか」ということが付されていることから、多変量解析の中身を分かりやすく伝えたいという著者らの思いを汲み取ることができ

る。最後の点として、旧版の内容に基づく第I部においても、新たな情報へと積極的に更新されていることがあげられる。既述の通り、旧版には出版

当時の最新情報が掲載されていたわけであるが、15年を経てそれらを再び更新・追加していくことは、並々ならぬ労力を要したと推察する。第二の点で指摘した分析事例についても、数多くの新たな事例が盛り込まれていることは、読者が理解するうえで大きな助けになるだろう。

以上を総括すると、本書は「統計的手法や多変量解析を活用して、どのような地域分析ができるのかを、具体的な事例から学びたい」と考える人に打ってつけの一冊である。本書は計量的手法による地域分析のゲートウェイであり、これを精読して内容を理解することにより、高度な専門書へと無理なくステップアップすることができる。計量的手法を用いた地域分析に興味のある学部生、

計量的手法が苦手だがその内容は理解したい大学院生、実践に先立ち地域分析の概要を把握したい行政関係者などに進めたい一冊である。

さて、こうして生まれ変わった「地域分析」に出会うにあたり、評者も本棚に並ぶ旧版の「地域分析」を手に取り、図らずも15年という時間を振り返る機会を有することになった。15年前に旧版の「地域分析」を手にして自分はどういう思いであったのか。そして、今、「新版地域分析」を手にする学生諸氏は何を思うのだろうか。本書をゲートウェイとして、地理学やGISの道へと進む若い学生諸氏がまた多く生まれていくことを期待したい。

(田中耕市)